

江本さんは、昨年の7月、国連第9回高齢化に関する会議に参加し、日本の介護問題について、NGO団体の一員として英語で発言しました。全日本年金者組合・増子啓三

年金不安考えて

老後資金2千万円問題で不安の高まった公的年金制度。愛媛大法

文学部4年江本果穂さん(21)〓松

山市鉄砲町〓は「なぜ、不安を持つ

人が多いのかを考えることが大

切。非正規など雇用の問題があっ

たり、年金を払えない状況の人も

いたり、いろんな課題が複雑に絡

み合っている」と指摘。同4年山

木隆盛さん(21)〓同市宮田町〓は

「(政策は)制度を必要とする人

の視点に立っているかどうかが大

事。(有権者自身が)どんな社会

保障を受けているのか学び、考え

ることも必要」と若い世代の思いを票に託す意思を語った。

全日本年金者組合宇摩支部長の

吉田幸重さん(75)〓四国中央市川

之江町〓は、老後に夫婦で2千万

円の蓄えが必要と試算した金融庁

金融審議会の報告書について「多

くの人が年金だけでは生活できな

いと感じており、間違っていない

のではないかと指摘。その上

で、報告書の受け取りを麻生太郎

金融担当相が拒否した対応に「な

かったことにしようとする姿勢は

問題」として。

減る「支え手」募る「老後不安」



街頭でアピールする年金引き下げ違憲訴訟の支援者ら＝6月21日、和歌山市一番丁

年金を下げるな

1年金

現場から
2019参院選

「ちょっとこれを見てほしいんよ」。和歌山市内の喫茶店で女性(77)が取り出したのは、ルーズリーフに手書きした最近の家計簿だ

女性は中学校卒業と同時に印刷工場などに勤務。結婚し子どもが独立、夫を数年前に亡くしてからは独り暮らしだ。1カ月の収入は国民・厚生年金と夫の遺族年金を合わせて10万6千円ある。

ここから毎月公営住宅の使用料約1万6千円、食費約3万円、光熱水道費約1

つた。

受給者「葬式代も残らない」

万円が出て行き、電話代やNHK受信料、自治会費、雑費を払うとほとんど残らない。急な出費があるたびに貯金を取り崩す。「このまま行けば自分の葬式代も残らない」

かつて胃がんを患い、脊髄骨折の後遺症も残る。「介護施設に入るお金がない。この先消費税は上がるし、年金は減るしで、国から『長生きするな』と言われてるように感じる」と表情を曇らせる。

6月21日朝、和歌山城公園前。「年金下げな」と大書きしたプラカードを持った人たちが、道行く人にアピールしていた。公的年金の減額は憲法違反だとし

住居費	16400	16400	16400	16400
電気	7321	4882	5857	3336
水道		2400		2387
ガス	5906	4873		4242
電話kddi	4778	4720		4703
NHK		4464		4460
税金				
計	105983	76781		97449
保険	17720	17720		17720

年金受給者の女性が付けている家計簿。収支が赤字の月も少なくない

て、国に減額分などの支給を求めて和歌山地裁で争われている訴訟の原告や支援者らだ。

この裁判で問われているものの一つが、政府が2004年の年金改正で導入した「マクロ経済スライド」だ。今の年金制度は、現役世代が負担する保険料などで高齢者の年金を賄う「送り」方式だ。

少子高齢化で年金の「支え手」が減る中、年金制度を将来も維持するため、年金額の伸びを物価や賃金より抑える仕組みで、15年度と19年度に実施されている。

1961年にスタートして以降、さまざまな手直しが加えられてきた国民年金制度。ただ、超高齢化や非正規雇用の増加など、社会環境の変化に十分対応できているとはいえない。金川准教授は「低所得・低年金の世帯に配慮した制度の再構築があらためて必要とされる時代になっている」と話す。

「国民年金だけで暮らしている高齢者の生活は本当に厳しい。憲法25条の『健康で文化的な最低限度の生活』が保障されていないのではなかいか。訴訟を進める全日本年金者組合本部の深谷登書記長はそう話す。

世界で最もはやく少子高齢化が進む日本。年金や介護など、老後を支える社会の仕組みは機能しているのか。県内の現場を歩いた。

老後の生活費が2千万円不足する、とした金融庁審議会の報告書。大きな議論を巻き起こし、改めて「老後不安」がクローズアップされた。和歌山の金川め

ぐみ准教授(社会保障法)は、「多くの市民は老後に2千万円足りない、ということ自体に驚いたわけではない」と指摘する。

◇ (白木琢歩)

岐阜から考える

老後の暮らし

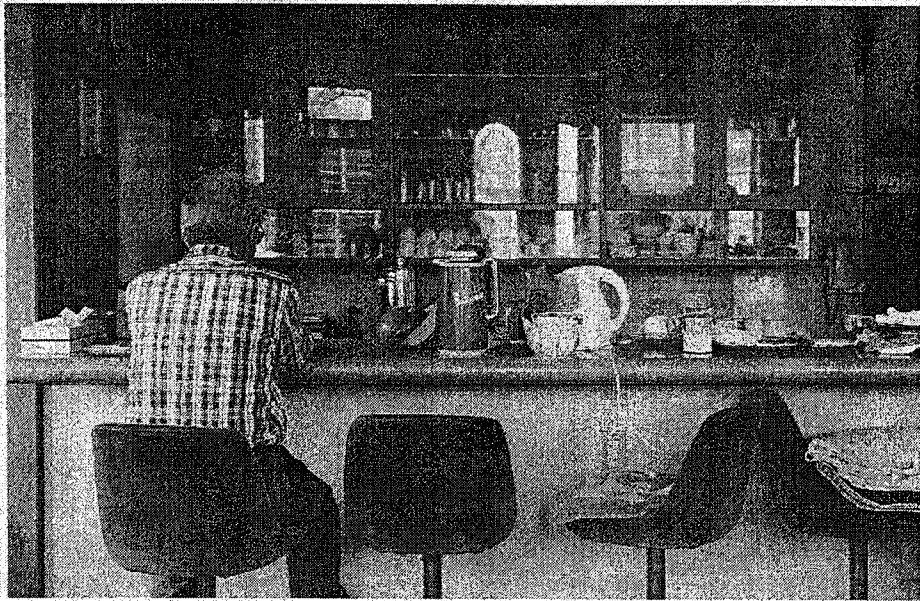
参院選スタディーズ・Lesson 4

うれしいはずなのに、心が晴れない。中津川市の原保さん(仮名)は八月、ひ孫が生まれる予定だ。年金に頼る生活は苦しくて、とても祝いの品など買ってあげられない。

「お祝いが言葉だけでは寂しすぎるよね」。老後の生活費の足しにしようと、妻(仮名)と経営するつもりで建てた喫茶店のカウンターで、涙ぐんだ。喫茶店は、自分のけがや妻の病気で今は閉めている。

海軍の街、神奈川・横須賀で生まれた。戦時中、激化する空襲から逃れ、父の出身地の中津川に引っ越した。中学卒業後、大工に弟子入り。七年修業して、独立した。酒やたばこ、賭け事は一切やらない。堅実な働きぶりが評判になり、次々と仕事を頼まれた。「天職だった」と振り返る。

「焼け野原の日本を経済大國にしたのは、私たちの人生に誇りを持ってきた。世代だ」と、仕事、仕事の



暗転したのは六十三歳のとき。使っていた電動丸のこがはねて右足のふくらはぎを切り、松葉つえ生活になった。年金の受給開始年齢を繰り上げると減額されることは分かっていたが、収入が必要だった。「背に腹は代えられない」と受給を始めた。

今の年金受給額は、妻とあわせて約十五万五千円。とても、それだけでは生活できない。右足のしびれに耐えながら月に十日ほど、住宅修繕などの仕事をする。多くても、収入は月八万円ほど。畑を借りて野菜を作り、何とか食いつないでいる。新聞の購読もやめた。

「服なんてしばらく買っていない」。月に一回、近くの温泉に夫婦でつかるのが、唯一のぜいたくだ。

厚生労働省の調べによると、二〇一七年度の年金の平均受給額は、国民年金の

妻と喫茶店を営むつもりだった。カウンターでたすむ原さん(中津川市内)で(布勝哲矢撮影)

みの人で五万五千円。厚生年金受給者は十四万四千円。月で八万九千円、年百六万八千円の格差がある。自営業者は定年がない、とはいっても、高齢になれば誰だって、けがや病気のリスクは高まる。働き続けるのには限界がある。原さんは「毎日、気が休まる時がない」という。

年金支給額の引き下げやマクロ経済スライドによる減額は違憲だとして、訴訟を起こした長谷川金重さん(仮名)大垣市は「戦後日本をつくり上げてきた私たちが、なぜ、社会の隅に追いやられるようなことをするのか」と憤る。

提訴からまもなく四年、時間もお金も費やしてきたが、闘争心は衰えない。将来世代への責任だと思っただ。老後に希望を持てる制度にしないとけない。これは若者のためだ。

年金以外に二千万円の蓄えが必要とした金融庁の報告書で、老後の不安が拡大する中で迎えた参院選。今秋の消費税率の10%引き上げの是非も問われている。原さんは言う。「どうやって暮らせばいいのだろうか。誰か教えてくれ」

(高橋貴仁)

年金では希望もてない

原さんは、先日の5月20日の岐阜地裁での証人原告尋問で参加しました。

全日本年金者組合・増子啓三 2019年7月17日